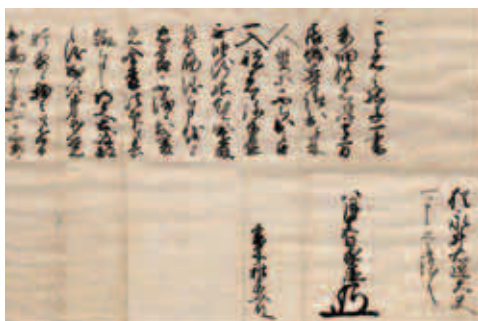


第35回 どうする家頼 く妻木父子の決断②く

妻木家頼（初名は頼忠）は、妻木貞徳の長男として永禄8年（1565）に生まれ、天正10年（1582）の本能寺の変後は、父とともに森長可に仕えました。天正12年（1584）、小牧・長久手の戦いでは長可が羽柴秀吉に味方したため、徳川・織田連合軍を相手に何度も戦いました。その後も森家の重臣として、秀吉による九州平定戦、小田原征伐、文禄・慶長の役等へ参陣したと考えられますが、記録がなく詳細な動向は不明瞭です。慶長3年（1598）に秀吉が亡くなると、主である森忠政は徳川家康派となり、慶長5年（1600）2月には信濃国川中島へと加増転封が決まりました。この時、家頼は森家から引き抜かれて独立することとなり、先祖代々の本領である妻木郷に留め置かれました。美濃・尾張・三河・信濃を結ぶ街道が交わる要衝土岐郡の警衛を期待された人事でした。

【関ヶ原の戦いと妻木家頼】
慶長5年（1600）6月、家頼は病気のため会津征伐への参陣を見合わせていたところ、7月11日に石田三成らが挙兵、美濃国内の諸将が続々と西軍につく中、家頼は家康へ味方することを選びます。交通の要衝である東美濃の東軍は家頼のみ、家康の信頼と期待に応えるべく、家頼は岩村城の田丸勢を相手に孤軍奮闘を続けました。8月末になってようやく援軍の遠山・小里勢が到着、家頼らは攻勢に転じて高山城、明知城、小里城を落とし、戦いの舞台は土岐城と岩村城へ移りました。東美濃の戦いは9月15日の関ヶ原の戦い後も続き、9月末頃に岩村・土岐両城の降伏開城で決着しました。7月から9月にかけて家康から家頼へ送られた5通の書状が今日まで伝わっています。書状からは当時の緊迫した情勢、そして家康からの信頼と期待が読み取れます。



妻木家頼へ宛てた徳川家康の書状
(日東家文書、土岐市指定文化財)



妻木家頼肖像画
(崇禅寺蔵、土岐市指定文化財)

イベントのご案内



美濃陶磁歴史館
☎55-1245



ミニ企画展 『どうする家頼 ～妻木父子の決断②～』

妻木家頼へ宛てた徳川家康の書状（上記写真）も公開しています。こちらも12月10日（日）まで。